

## 阿部一彦先生を送る

寺尾 剛

本学国文学科教授（大学院文学研究科文学専攻国文学コース兼任）阿部一彦先生が、定年により本年三月をもって御退職されることになった。名残惜しい限りである。

先生は昭和五十三年四月、愛知淑徳短期大学専任講師として着任され、十七年にわたり短期大学の発展に御尽力なされた後、平成七年四月より愛知淑徳大学文学部教授に就任、さらに平成九年四月より大学院文学研究科教授も兼任されて現在に至っている。数えてみれば、愛知淑徳学園には三十一年もの長きにわたり奉職なされてきたことになる。その間、文学部長を四年間にわたって務めるなど、数々の重責をお引き受けになり、こなされてきた。本学園の発展において先生の存在が無くてはならないものであったこと、以上の事柄を見ても明白である。

先生の本学への御功績は学校業務に止まるわけではない。先生の御専門である戦国軍記文学研究における堅実かつ斬新な研究成果は、学界に大きな足跡を残したばかりでなく、戦国時代に対して関心度の高い地元愛知県及びその周辺に在住する本学学生あるいは地域住民の方々に大きな刺激と関心呼び起こして下さった。ちなみに先生はNHK、中日文化センター、毎日文化センター、名古屋生涯学習センター等々の講師を務めるなど、地域の生涯学習においても尽力されてきた。地域貢献という意味でも、先生の御功績はまことに大きいと言わねばなるまい。

個人的な感想を申し上げれば、先生は温厚篤実な御人柄であると同時に、人を惹きつけて止まない不思議な「オーラ」を纏っていらつしやる方である。私はエンカウンターキャンプの自由見学の際にも、なぜかいつも先生に同行させていただいていた。先生の歴史地理や文学遺跡に対する含蓄ある御教示を賜りたかつたこともあるが、何より側にいるだけで暖かく感じられる、その御人柄に惹かれたからである。この感覚は学生達も同じなようで、先生の周りにはいつも学生達が集まってきた。昼休み時の研究室はしばしば学生達であふれていた。先生の教育者としての熱意と愛情には一方ならぬものがあつて、国文学会運営委員との交流、国文学会旅行への参加・協力、歌舞伎鑑賞会の企画等々、常に学生達との交流を絶やすことがなかった。

国文学科の発展を陰から支えていたのは、実に先生のこの学生達への細やかな愛情と指導、そして天性の暖かな御人柄であつたのだと思う。そして、今、先生の御退職を誰より名残惜しんでいるのは他ならぬ学生達であると確信している。先生は北海道旭川の御出身である。先生からは幾度となく彼の地の風土や文学についてお聞かせいただいた。先生の御言葉に触れながら、私もまぶたの裏にまだ見ぬその地の光景が浮かんだものである。仄聞するところによれば、先生は今後、その愛する郷里へ御帰りになれるとのことである。羨ましい限りである。

先生、御退職後は、御専門の戦国軍記文学研究をさらに深めていかれることと思います。しかしながら、その一方で、先生の御育てになって来た数多くの学生や卒業生達のために、そしてわが国文学科全ての関係者のために、今後とも変わる事なき叱咤激励のほど、何とぞよろしく御願ひ致します。

(文学部国文学科主任)